
魔界の二柱

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界の二柱

【Nコード】

N4540Z

【作者名】

国見炯

【あらすじ】

赤字工場の事務員が魔界の女王に転生。金遣いの荒い魔王と喧嘩しながらも魔界で暮らす日々のお話です。一話は本当に短いです（0は350文字程度。それ以外は1000文字程）。短編集に魔界の二柱の短編（女王視点・魔王視点）が載っております。

ウトウトとしながら乗っていたバスが、体験した事のない揺れ方をした。

一番前に座っていたのが良かったのか悪かったのか、バツチリと理由を目撃しながら目の前の鉄の棒に顔面を強打した。

ありえない。

これでも一応女よ。

絶対歯、欠けたよね。

何ソレ。

鼻も潰れた。

ありえないよね。

まだ結婚してないの？何て聞かれる年齢には達しているけど。化粧なんて適当だけど。

女を捨ててるように思われているけど。

顔面強打を喜ぶ程女は捨ててない！

っつーか、何故バスの前に飛び出した。

自殺か。

世を夢んでか。

うちの会社の従業員を見習え！

この間なんか安売りのペンキを買ってきて自分たちで屋根を塗ったんだぞ！！

赤字工場ですがそれが何か？

赤字工場に倣って財布の中も真っ赤傾向にありますけど何？

ああ、思考がおかしい。

身体が動かない。

目の前のチカチカが消える。

え……まさかこれで終わり？

今月の伝票処理、まだ終わってないんだけど。

パリン、と何かが割れる音が響いた。
不快な音じゃなくて、澄んだ音。

初めて聞くわー。何か癒される。
って少し顔面が痛い……ん？ 顔面が痛い？

「って私の顔面ツツ！！」

視界の確保はオッケー。包帯が巻かれてる形跡はない。
つまり私の顔面は無事という事だね。よしよし。

ん？

んん？？

何でか視線が痛い…。

え？

どうして見目麗しい人たちに囲まれてるの私？

両手で顔を押さえつけていたんだけど、指の隙間から見えるのは
色とりどりな人たち。尻尾があったり羽があったり角があったりと、
ありえないものが生えていたりするけど見目麗しいからまあいいか。

鑑賞する分には何ら問題なし。

そう思っていたら、その中でも一際輝く人が一歩分足を前へと踏み出し、私を真っ直ぐに見つめてくる。

ある意味、熱視線、とかいうヤツ。

「女王様。お待ちしておりました」

優美に微笑み、片膝を付く男性。ちなみに、この人は蝙蝠のような羽が生えている。

「顔面——と申しましたが、女王様のお顔は我等魔族の中でも一際美しく、大変感服です」

声も美声なんだけど、その中で気になる所が一点。

あれ？

私が観賞用？

とは言っても、見るに耐えない程じゃないけど、こんな美形を目の前に観賞用になるかと言われると、おもいつき首を横に振る。

そんな容姿。

けれど、そこまで考えて違和感が幾つか。

目線を視線に落とした先にある私の両手。いつも見ていた両手のはずなんだけど、生まれたての赤ちゃんのように白く、柔らかい肌。ほっそりとした、指先。桜貝のような桃色の爪。

わきやわきやとぐーぱーを繰り返してみる。

うん。私の思うとおりに動くわ。

はてさて。これはどういう事かしら。

そして三段腹とまではいなくても、ランニングしなきゃヤバイかなー、なんて思っていた腹肉は引き締まってるし。

んー… とういう事だろう。ちょっと理解の範疇を超えてるかな。

「鏡貸してくれる？」

見た方が早いよね。

「どうぞ」

「ありがとう」

目の前の男性が、人差し指を宙へと突き出したら等身大の鏡が目の前に現れた。色々と疑問はあるものの、とりあえず横へと置いておく。

そして鏡を見てみたんだけど…。

「あらら。別人」

こういう時、悲鳴をあげて気絶出来る様な可愛い性格だったら良かったのに。

テンパってる癖に、無駄に冷静な私。勿論自覚あり。

「さて……詳しく説明してもらえる？」

ひょっとして、若かりし頃に読んでいたアレかな？とは思ってる自分がいるんだけどね。

どうせなら夢オチ希望だけど…。

あのバス事故を考えると、色々と複雑なものがあるよね。

ざつと説明を受けました。

大まかだけど。そこから分かった事といえば、赤字工場のしがな
い事務員だった私は、あのバスの事故で顔面強打。その際頭も強く
打ち付けたらしく、ほぼ即死。ほぼ、ね。ほぼ。

あの顔面強打なんて体験は死んだ後も忘れられておりませんとも。

しかし、と改めて辺りに視線をさ迷わせてみれば、私が聞いた澄
んだ音の残骸が私の周りに散らばっていた。

これはなんでしょう？

視線だけで蝙蝠の羽の人に問えば、にっこりと艶やかな笑みを返
される。

「これは、女王様の卵です」

「へえ、卵」

「ええ、卵です」

「私って卵から生まれたの？」

「勿論です」

……勿論、だって。

軽くカルチャーショックを受けちゃったりしているんだけどどう

だろう。

そんな私の疑問も蝙蝠の羽の人はさらりと流し。あれ、絶対気付いていると思うんだよね。気付いてて流してると思うんだよね。

…いい性格してる。どこぞの社長みたいなヤツ。

「こちらは、元はこのぐらいの大きさの卵石でした。魔界においては一番価値があり、尊い鉱石でもあります」

「へえ」

「銀色の卵石には、女王様が宿り生まれますから。我々にとっては何を置いても守るべきものなのですよ」

「ふうん。銀色の卵石にはって事は、他の色もあるの？」

銀色が女王の色なら、金色は魔王だったりしてね。魔界って言うてたし。

「勿論です。金色の卵石には魔王様が。こちらは300年ほど前にお生まれになっておりますが」

「……300年。それはまた長生きだね」

生前の私の十倍程生きてるね。

「女王様はどうやら変わった知識をお持ちのようですね。私は50歳ですが、十分の一も生きてはいませんよ」

「…………へえ」

それはとっても長生きな種族だね。

そして、私の中身が生粋の魔界の住人じゃないという事も、理解
ありますか。他の人たちが、私に対してひたすら頭を下げている中、
蝙蝠の羽の人だけが私の前に立ち、悠然と微笑む。

うん。つまりはかなりの実力者。でもって頭もいいよね。性格は
悪そうだけど。

「本来ならば、女王様は魔王様の対の存在。同時に生まれるはずが、
魔王様の力が強く、対である女王様の誕生が遅くなってしまったの
ですよ」

「強いんだ」

「勿論。対である女王様の力も、魔王様と拮抗しておりますが」

そうなんだ。

魔王と拮抗って事は多分、魔界じゃ一番って事だよな。
でも魔王って…。

「人間と仲が悪かったりしてるの？ 勇者に退治されたりしない？」

私自身がある意味ありがちな体験をしているという事は、勇者に
退治されるまでが一連の流れ、という事もありえるんだよね。

そう思って聞いてみれば、思いつきり笑われた。

顔……崩れ過ぎじゃない？

けど、大口を開けても美形はやっぱり美形。

例えお腹を押さえるようにしつつ身を擦じらせても、角度を変え
ても美形は美形なのよ。

「魔王様は既に6回程人間界を壊滅状態に追い込み、 勇者と名乗

る人間は両手じゃ足りない程塵に返してますよ」

「……………何で300年で6回も？ 多くない??」

そんなに回数が多かったら立ち直れないね。そう思って聞いてみたんだけど、返ってきた返答は予想の斜め上をいくものだった。

「資金不足だからでしょうね」

「…資金不足？」

「はい。魔王様は集める事が好きですから。天界への襲撃もあわせたら、両手では足りない数ですよ」

「……………はい？」

今、色々と変な事を聞いたような気がする。

「攻め込むと、お金になりますから」

私の引き攣った頬を眺めながら、蝙蝠の羽の人が言い切る。
いや、だからね。

資金調達で攻め込むって……。

「リスト頂戴」

「はい？」

「魔王が買った購入品リストを用意してくれ、と言ったのよ」

節約もなしに、他所から分捕ったのか魔王というヤツは……赤字

工場の事務員経験者としては、本当に見過ごせない。

寧ろ、リスト次第じゃ殴り込みに行くからね。

実力は拮抗してるって言うてたし、殺されはしないでしょ。多分ね。

案外リストはあっさりと渡された。元々手元にあったのか、それとも単に魔王の側近が頭を悩ませていただけなのか。

よくわからないけど、そんな事はどうでもいい。

気合を入れて腕まくりをしつつ、インク式のペンと紙を用意してもらった。勿論赤色のインクも用意済み。この紙は複製だっていうから、遠慮なく書き込めるね。

そう思ってたリストの上からざっくりと見てみようと思ったんだけど、一行目から視線が釘付けになる。

何、これ？

いやいやちょっと待って。

「……これって」

羽ペンの先でクイツと一行目を指差す。ちなみに、あの蝙蝠の羽の偉そうな人は実際魔族の中じゃ偉いらしく、強制的に私の側近になった。名前はアスターニエとかいうらしい。

長いなあ、と思うけど、私の身体に刻まれた名前の方が長いから何も言わないでおく。

人間、触れない方が良くない事もあるって事で。

「それがどうかしましたか？」

「購入したの、先月なんだ」

「そうですね」

「魔族が、何に使うの？」

「さあ。肩こりという人間が悩むものには無縁ですから。魔王様に聞いて下さい」

にこつと相変わらず無駄に色気を放つ艶やかな笑みで言い切る。しかし何でだろう。自分の中で脱観賞用容姿を果たしたアスターニエを見ていると、まったく心が揺れ動かないんだけど。

気分は触るな危険という感じ。

第一の側近だから毎日会うつみたいだけだね。

「無縁なんだ。肩こり体質だったから嬉しい…じゃなくて、じゃ、次」

一行目はマッサージ機。異世界購入。

二行目はぶらさがり健康機。やっぱり異世界購入。

「ですから、魔族には無縁の…」

「もういい。次」

「女王様。人の話しは最後まで聞くべきですよ。でないと…」

「でない又何？」

「泣いてしまいますよ？」

小首をちよつと傾げて、輝かしい笑顔で言い切られた。

……非常に腹がたつのはなんでだろう。

「泣け。喚け。そして庭掃除でもしてろ」

思わず感情のままに、背景におどろおどろとしたものを背負ったまま言い切る。すると、アスターニエは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべたけど、次の瞬間には愉悦を交えた表情へと変わる。

その変化は何だ？

まったく良い気はしないんだけど何でだろうねー。

「やれやれ。此度の女王様は口が悪い。塞いでしまいますよ…？」

愉しげに。本当に心底愉しげに顎をクイツと人差し指で持ち上げられ、ものすごくアスターニエの顔が近くなる。

「…………庭のカエルとでもしてなさい」

数時間前まではうつとりするような観賞用美形だったのに…。

今は背筋に悪寒が駆け抜けるような対象になってしまったようなちよつと勿体無い気もするけど、要因……敗因？はアスターニエの性格だろう。絶対。

「ああ、本当に女王様は楽しい程口が悪い」

「それよりも、三行目のお取り寄せグルメって何？ 魔族の食事は人と一緒？」

というか、異世界が好きね。本当に。

「つれないですねえ。まあ、今回はいいでしょう。」

その件については種族ごと、でしょうか。人の食事でも食べられなくはないですよ。好みさえ合えば。ただ魔王様、女王様については鉱石から発せられる魔力が一番の食事だという話は聞いた事があります。」

「へえ……」

「保管する呪があるから、女王様が心配するような腐らせる——という事はありませんよ?」

「まあ、腐らせるのも心配だったんだけどね。数が多いから」

尋常じゃなく。寧ろ買物中毒患者だろう。魔王様というヤツは。

「側近に配ったんじゃないですか?」

「お歳暮か……そんな気遣いをするタイプ?」

それだったら、まだわからなくもない。と思っておこう。うん。

私の心の平和の為に。そしたらちゃんとアスターニエが答えてくれましたとも。

満面の笑みで、心底嬉しそうに。

「いいえ。今の魔王様がそんな気遣いが出来るような方なら、天地がひっくり返っておりますよ」

「…………へえ」

その素敵笑顔。

無性にはりせんでぶん殴りたい。

美形なのになー。何でだろうねー。アスターニエだからかなー。

ひたすらチェックチェック。

途中からアスターニエに聞く事は諦めた。返ってくる答えはワンパターンだからね。寧ろイラっとくる事の方が多いからね。

しかし、2ページ目に差し掛かった所で資料を置いた。遠慮なく、机の上に投げ捨てたといってもいい勢いで叩きつける。

魔王。

金遣いの荒い魔王。

これはやっぱ、買い物依存症でしょう。

何に使うか分からない健康器具。サプリメント。童話から大人向けまで幅広い本。後は異世界の文明の機器。これは維持費にもお金がかかっていそうだけど。

で、使うだけ使って資金が底を尽いたら、天界もしくは人界に攻め入る。勿論資金稼ぎの為。

で、本来なら対になるはずの天界の神王も、何故か魔王には叶わない。はっきり言えば規格外。チートもいい所。

「アスターニエ。こういう道具を用意して。終わったら魔王をぶん殴り……じゃなくて、話し合いに行くから」

ぶん殴らなくて済むならそっちの方がいい。
好き好んでぶん殴りたくなかないし。

「わかりました。久しぶりにあちら側の領地に行きますねえ」

「ふうん。あんまり行き来しないの？」

「ええ。あちらは魔王様の領地ですから。ですが、女王様が生まれ
たとなれば、行き来も増えるでしょうけど」

「そうなの？」

何でだろう。そんな疑問の眼差しを向けてみれば。

「王の魔力によって、特産が変わるんですよ。女王様の魔力は何を
齎すのか。今から楽しみですよ」

「……へえ」

ああ。なんていうかきつと今の私は苦虫を噛み潰したような表情
をしてると思う。

これが何かしょぼいものだったら、きつとアスターニエはチクチ
クと言いまくると思うんだよね。嬉々として、傷口に塩を塗りこむ
ように言葉を連ねるんだろうな。

それを考えると今から胃が痛い、服の上からさすっていたらア
スターニエが分かりやすく笑う。

だからその笑顔は嫌な予感しかないってば。

「大丈夫ですよ。女王様の齎すものならば、我ら女王様の臣下は何
であつても愛せますから」

私に右手を差し出し、美麗な笑みを惜しむ事無く向けてくる。

…ち。観賞用であつたのならウツトリするのに。

そんな私の思考を読んだのか、アスターニエがつれない方だ、何て言いながら差し出していた手を引つ込める。

何をするにしても、楽しそうでいいね。

これから無駄遣いな買い物依存症の魔王と対峙するかと思うと、気が重いんだけど。自分で決めた事なんだけどさ。

赤字を見ると、何ていうか整理しなきゃ落ち着かないのよ。

あつ。赤字工場のトラウマが。

「それでは女王様の望み通り、こちらを準備してまいります」

「あ…うん。お願いね。強度はそれなりに。潰れて欲しいわけじゃないからね」

「それは残念です」

「残念ですだからじゃないから」

そんな瞬殺な凶器を作りたいわけじゃないのよ。

あくまでつつ込み道具のハリセンが欲しいだけだからね。結構痛いだろうけど。

「一時間もあれば準備出来ますから、女王様は優雅にティータイムでも楽しんでいて下さい」

「一時間か…早いね。まあ、優雅かどうかは知らないけど、わかつ

た。人間の味覚用の紅茶がいいな」

「わかっておりますよ。それでは」

優雅はどっちだが、とつつこみを入れなくなるような優雅すぎる動作で部屋を出て行くアスターニエ。

一般市民の私にはいまいちついていけないような気がするなあ。

結論から言うと、紅茶はとっても美味しかった。うん。格安安売りの味じゃなく、高級店で100gシ万円の味。

一回だけお付き合いで飲んだ事があるから、間違いないはず。

ハア…明日も飲みたい。

けど、ね。

「こんな高い紅茶飲んでて大丈夫？」

赤字、な魔界だよね。

不安で仕方なくて、はりせん片手に現れたアスターニエを見ずに聞いてみた。

「こちらの領地は細々とっておりますから大丈夫ですよ。前女王様時代に蓄えていたものもございますから。

どうやら、女王様は魔王様の対らしく、無垢ではなくしっかりとした方の魂が引っ張られる傾向にあるみたいですね」

「え？ 何それヤダ」

思わず呻く様な声を出しちゃったじゃない。

それを言われると、魔王の浪費が激し過ぎるから堅実な赤字工場の事務員の私が引っ張られた、とかそういうオチ？

「微妙……」

「ふふ。私は嬉しいですよ。此度の女王様がこのようなしつかりとしたお方で……調教するのかされるとのか、どちらでも楽しみです」

「……」

無駄に素敵な笑顔。

きつと、一般の女性ならウツトリとしちゃう程の美形。言ってる内容は難しくないけどね。

「寝言は寝てからいいなさい。じゃ、魔王とかいうヤツの所に行くわよ」

はりせんをアスターニエからぶんどると、私は感の赴くままに足を進めようとする。なんとなくこっちのような気がする。

「流石は女王様です。魔界は初めてであっても、わかるんですねえ」

どうやら合っているらしい。

「女王様。魔王様との初対面です。衣を……」

「んん？」

相変わらず何処から取り出したか分からないけど、アスターニエが手に持っているのは真っ白なマント。

ふわんふわん。

こんな可愛いのに似合わない、と言いかけようとして止めた。そういえば、容姿が違っただけ。そんな事を考えてばんやりとしてみると、アスターニエが甲斐甲斐しく私の服を外出用に変えていく。あら可愛い。

もこもこのフード付きマント。

肌も白いから、本当に全身真っ白という感じ。

「…白色なんだ？ 白って、天界っていうイメージがあるんだけど？」

この身体にはとても似合ってると思うのよ。ナルさんの発言じゃなく、この身体が自分のものだっていう実感がまだないからだと思うんだけどね。

「本当に面白い事を仰る。女王様が似合うならば何色でも構わないのですよ。女王様には白色が。輝くような純白が似合う。なので、私の衣も女王様に合わせてみました」

「……………似合うね」

そして手品か。

一瞬でアスターニエの服が変わる。

いや、似合うよ。似合うんだけどね…………。

「似合うでしょう？」

コイツこそナルさんだろう。

うん。ナルさん決定。

「まあ、いいや。さあ、行くわよ」

「……何がいいのかわかりませんが。きっと女王様の事ですから碌な事を考えていないんでしょうねえ」

少しだけ目を細めて私を見たアスターニエの言葉。

「……アンタも大概失礼だよね」

ホントおかしいなあ。

まだ出会って間もないはずなのに、何でお互いこんな扱いになってるのかなあ。

スチャツとはりせんが宙をきる。

うん。振り回し具合はオツケー。調子はいい。どうやって測ったのかはわからないけど、私の手にこれでもかというぐらいに馴染むはりせん。

アスターニエに案内されながらたどり着いた魔王城の前で、私は腕を組んで城を見上げた。女王の城も広かったけど、魔王の城も広い。

小市民にとっては一生縁のない、場違いな場所。

けれど今日はそこに一歩足を踏み込み、魔王と対峙する。思っ
て気合をいれてみるけど、少し心臓がガタガタ言ってるかなー。

……どうしよう。色々ややばかったら。

頭の中で思い浮かべている魔王像といえば、RPGに出てきそうな感じの魔王。想像力が貧困とか言うな。多分、見た所美男美女が多いから、きつと魔王も美形だとは思っただけだね。

だけど美形が全て目の保養になるかといえば、なるわけがない。美形なのに目の保養から外されたアスターニエが私の後ろに控えているし。しかし、さっきから余裕だね。アスターニエって。

魔王領の魔族からは何だこいつら？なんて眼差しを向けられているんだけど、それを軽く流している感じがするし。

「大丈夫ですよ。女王様に敵う存在はおりません」

「……魔王と引き分けだっけ？　けど、力の使い方なんて知らないよ」

アスターニエの言葉に、首を横に振りつつも私の表情から笑みが消える事はない。小市民の心臓がガタガタ音をたててはいるけど、なんとなく安心感もある。

大丈夫。何とかなる、とかそういう女の感？

多分、女王だから、とかそういう単純な理由なんだろうけど、どうにも害される気がまったくしないのよね。

「さあ、行こっか！」

はりせんを振り回し、先を城へと向ける。

気合は十分。

書類の準備もおっけー。

さて、この詳細を聞きに行こうと足を踏み出した私のマントを、アスターニエが遠慮なく掴んだ。ズルリと転びそうになったのは私の所為じゃない。

おもいつき後ろに引かれれば誰だって転びそうになると思う。

顔面強打の次は後頭部強打なんて洒落にもならない。私は重力に引つ張られる身体を、無意識に魔力で浮かせた。

それによって中途半端な体勢で宙に浮かぶ私の身体。

……魔族って空……飛べるんだ。

いやビツクリ。

ちよっと懂れてたけど。

嬉しいけど。

浮かぶんだ。

「浮かびますよ。飛べない魔族はある意味希少でしょうねえ」

「……」

人の感動をあっさりと打ち砕くアスターニエ。私が魔族の生態に慣れていない事は知っているのに、仕方ない女王様ですねえ。何て嬉しそうに言いながら魔力で身体を浮かせる。

「……」

「どうかしましたか？」

どう見ても。角度を変えても魔力よね。宙に浮いてるのって…。

「羽で飛ばないの？」

蝙蝠の羽があるのに。

ああ、でも。人を飛ばすにはちよつと小さいのかな。身長が180cm程なのに比べ、羽は広げたとしても50cmぐらい？

「もう少し形態を本性に近付けたら飛べますよ」

「…形態？ 本性？？」

「はい。それよりも魔力で飛ぶ方が楽ですが。慣れていますので」

「へえ……」

やっぱ、見た目はほとんど人と変わらなくても魔族っていう種族

なんだね。しみじみと実感しちゃった。

「…女王様」

「何？」

当初の目的を頭の片隅において、まじまじと蝙蝠の羽を見てたらアスターニエのちょっとだけ真面目な声が上がから降ってくる。そういえば、こういう真面目な声は珍しいかも。大体観察してるか、遊んでいるような声だけだったから。

「どうやら、女王様の魔力に呼応してくれたみたいですよ」

「……ん？」

私の魔力に？

「それって…」

ひょっとして。

と、言おうとして止めた。

階段を上がりきった場所に立っていた男性。

深い闇を体現したような男の人が、ただ口を噤んで私を見下ろしてた。

「魔王…」

まさかここまで出迎えてくれるなんて。ちよっと、驚いちゃったかな。まあ、やる事は何も変わらないん

だ
け
ど
ね。

ちょっとだけ、RPGに出てくるような魔王だったらどうしよう
って思っていたけど、目の前にいる魔王はまさしく魔王とばかりの
空気を纏ってる。

うん。想像していたのより、魔王っぽい。

私が純白の衣に身を包んでいるのと対照的に、漆黒の衣に身を包
む。

今までにない美形オーラが。

アスターニエも半端な美形じゃないと思うんだけど、それに輪を
かけてすごい美形だね。

階段の上から私を見下ろしている魔王は、それ以上は動かずにた
だジツとしてる。私が動く事を待っているのか、あくまでも視線は
私を捕らえてた。

ギュッと、気合を入れる意味を込めてはりせんを握る。やっぱり
緊張するけど仕方ない。ここで目的を果たさなければ、何故ここに
来たと自分でつつこんじゃうよね。

「アスターニエ」

私の後ろに控えているアスターニエに向かって手の平を見せる。
ここに来るまでの間、はりせんを除く荷物は全部アスターニエが持
っていてくれた。

女王様に持たせるわけにはいきませんから、と……胡散臭い素敵

な笑顔で言い切ったから、遠慮なく資料の山を持たせる事にしたんだけど。

「一番だけちょうだい」

帳簿の数が多いから、城を出る前にそれに数字をつけたんだよね。まさか全部並べて見ろって言ったって、見るかどうかわからない初対面の魔王だし。私の言葉に軽く頷き、アスターニエが一と書かれた紙の束を私の手の平へと載せる。

丈夫な紐で結われ、そう簡単にはばらない台帳。

一段落ついたらノートを作りたいよね。寧ろ異世界からお取り寄せするぐらいなら、便利用品をお取り寄せしようよとつつ込みたいけど、今それを言った所で通じるかどうか解らない。

まあ、一番の理由としては、全部詰め込んだら私がパンクするし。そんな理由で、魔王に尋ねるのは台帳の一番だけ。

ギュツと力を込めて台帳を掴んだ後、私はアスターニエをその場に留めつつ階段を上っていく。

しかし、遠くで見ても近付いてみても、美形だ。

地球の大多数の男性に喧嘩を売っているんじゃないかと思えるぐらい、ここは美形の宝庫。ああ……ここまで顔の良すぎる連中が多いと張り倒したい！

天使の輪が出来まくっている艶やかな髪。

何その肌艶ってつつ込みたい。手入れなんかしてないくせに染みもニキビも無縁とばかりに輝いて嫌味か。

高い化粧品を使ってひーこら言いながら肌を維持しようと頑張っている女性に喧嘩を売ってるのか。

最終的にはコーラゲンを飲んでましたけど何か？

「女王様。口は噤む割に何となくだだ漏れですよ？」

「うっさい。女の敵め」

私の不穏な空気を感じてか、アスターニエが後ろからしっかりとつつ込みを入れてくれる。脱・観賞用を果たしたとはいえ、アスターニエは十分すぎる程の美形。

魔王には及ばないものの、肌艶はやはり女の敵の称号に相応しい。

さて、改めて女の敵トップであろう魔王を見つめる。

くそう。天使の輪、いいなあ。あの髪 of 艶やかさ。どんだけ高いトリートメント使ってもあんな風に綺麗に出た事なんてないわよ。気分はどんなシャンプー使ってるの、後で教えてね。よね。まさしく。

「初めまして。魔王さん」

「……」

カッン、とヒールを響かせて、階段を一段上る。

「この度、女王として生まれた者です」

もう一度、音を響かせる。

「さて、じっくりとお話したいので、少しお時間よろしいかしら？」

右手にはりせん。左手に帳簿。
あら。何ていう無敵感。

「……」

私が近付いても、言葉を発しても口を噤んだまま無表情を維持する魔王。けれど、ほんの少しだけ表情が動く。

私が魔王の目の前に立ち、その綺麗過ぎる顔を瞳に映した瞬間に。

「さあ、お話ししましょう?」

勿論、用途は何かジツクリと聞くんだけどね。
少しの時間で済めばいいなあ。

8 ―魔王サイド

勇者、と名乗る人間が幾度となく勝負を挑みこんできた。

その度に怨嗟の言葉を吐き出し、いかに魔王という存在が悪であるか。生きていけない命であるかという事を怨念をこめて吐き出す。

まあ、当たり前だろうな。

特に利を得たいわけじゃなく、退屈しのぎに人界を半分程壊滅させたのだから。

「魔王様」

「……」

側近の魔族に珍しく物言いたげな表情で話しかけられ、俺は視線だけを軽く動かす。人界や天界に攻め込む時さえも、こんな言いたげな表情は浮かべない。

「お客様がお見えになりました」

「……客？ また勇者とかいう人間か？」

勇者はよく来る。

天界は人界程被害がないからなのか、俺の逆鱗に触れぬように魔

界へ来る事はないしな。

「いえ……違います」

やけにもったいぶった側近の言い方に、俺の眉が微かにだが不機嫌そうに動く。

「女性……女王様です」

側近の言葉が、俺の耳に届いてからその意味を理解するのに、ほんの少しの時間を要した。

300年現れなかった女王。

俺の対であり、俺と肩を並べる存在であつたはずの魔界の女王。だが、俺の力が強すぎるとかいうふざけた理由で、俺と同時に生まれなかったんだつたな。

女王さえ生まれていれば、こんな退屈はしなかったのだろうか…？

そんな言葉が、幾度と無く脳裏を過ぎった。

その女王が現れた。

歓喜に、心が震える。

「そつか。女王か」

俺の、淡々としながらもその内に籠る感情に気付いたのか、側近たちが一斉に頭を垂れた。

「今回の神界への戦は無しだ。女王と遊ぶとしよう」

目に付くものもなくなってきた。

暇つぶしに、また神王と神女王と遊んでやろうかと思ったが、と
りあえず保留にしておいてやる。

俺の対であるという魔界の女王。本当に、対なのか。それを確か
める方が重要だからな。

「女王様にはアスターニエが付き従っております」

「そうか」

「お供致します」

「許す」

普段は供など許しはしないが、女王と遊ぶにはあの側近が邪魔だ。
そうになると、俺の側近をあてがった方がいい。

「適当に遊んでやれ」

俺の側近——キアースと女王の側近であるアスターニエの实力は
互角。拮抗を保つ世界では仕方ない事。

「勿論です」

「……」

無表情を保ちながらも、何処か嬉しげなキアースを視界の隅に捉
えながら、俺は地面につくような長い漆黒のマントを翻した。

負けない。けれど勝てない相手との勝負。

生まれてから初めてだ。

その時の俺は、今のキアースのような表情を浮かべているのか…
…さあ、女王。試してみようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4540z/>

魔界の二柱

2012年1月11日12時45分発行